

中世の山城『篠脇城跡』試掘確認調査の成果について

郡上市教育委員会

1 篠脇城跡の紹介

(1) 位置

岐阜県指定史跡篠脇城跡（昭和 48 年指定）は、郡上市のほぼ中央に位置する大和町牧地内の長良川支流栗巣川左岸の篠脇山（標高 486m）に立地します。同地内には、篠脇城跡や国指定名勝東氏館跡庭園（昭和 62 年指定）など、中世の武将で和歌の名門である東氏やその時代に関する遺跡が残っています。

(2) 城の歴史

東氏は鎌倉幕府の有力御家人千葉氏の一族で、下総国香取郡東庄（現千葉県香取郡東庄町）を治めた際に、東氏と名乗るようになりました。承久 3 年（1221）、東胤行が承久の乱の功績により美濃国郡上山田庄（現郡上市八幡町、大和町、白鳥町の一部）を加領され、大和町剣地内に阿千葉城（大和町と白鳥町境にある山城）を築き、郡上東氏の開祖となりました。

14 世紀初め頃、郡上東氏第 4 代東氏村は大和町牧地内に居館や山城を築いた後に、阿千葉城から拠点を移したとされています。応仁 2 年（1468）、美濃国守護代斎藤妙椿に篠脇城を奪取されましたが、第 9 代東常縁が妙椿に和歌を贈り、その和歌に感銘を受けた妙椿は篠脇城を東氏に還したとされています。天文 9 年（1540）、第 11 代東常慶は朝倉氏に篠脇城を攻められ撃退しましたが、これを機に翌年、八幡町安久田地内の赤谷山城（郡上市役所の南東にある山城）を築いて居城としたため、篠脇城は廃城になったとされています。

(3) 特徴

図 1 は、令和元年度に作成した篠脇城跡の赤色立体地図です。この赤色立体地図から、篠脇城跡の最大の特徴である、山上の曲輪を囲むように築かれた畝状堅堀群がはっきりと確認できます。地元ではこの畝状堅堀群を「臼の目堀」と呼んでいます。尾根続きとなる南側は、土塁や堀切によって遮断されています。



図 1 篠脇城跡の赤色立体地図

2 調査の目的

本年度の調査は、山上の曲輪にどのような建物が建っていたか、篠脇城がいつ頃築かれたか、などを確認するために行いました。

3 調査の概要

山上の曲輪、土塁部分にトレンチ（試掘坑）を 3 箇所設定しました。調査期間は令和 2 年 9 月 14 日から 10 月 16 日、調査面積は 92.85 m²です。調査期間中、郡上市篠脇城跡・東氏館跡調査検討委員会の中井均委員長（滋賀県立大学人間文化学部教授）、内堀信雄副委員長（岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化

